

中国における日本語の聴解授業の実態と課題 — 4大学の担当教師へのインタビューを通して —

尹 松

要 旨

本稿は、中国の4大学における日本語学科の聴解授業担当教師にインタビューを実施し、その内容を分析したものである。インタビューの内容から、以下のことが明らかになった。(1) 聴解授業は1年次から設けている大学と、1年次の後半あるいは2年次から設けている大学に分かれており、授業内容は4大学とも2年次の後半から日本語能力試験の対策を中心とする傾向が見られた。(2) 指導法については、語彙や文の意味から全体の内容を理解させるような指導をとっている。

【キーワード】中国の日本語教育、日本語専攻、聴解授業、『大綱1990』、『大綱2000』

1. はじめに

中国における外国語教育は伝統的に実践力の養成を目的として行われており、段階的には、大学1・2年で外国語の基礎をしっかりと固めた上で、3・4年でさまざまな知識を身につけ、外国語教育の効果を上げようとする。しかし、具体的に外国語教育の現場ではどのような教育が行われているかについてはまだ十分に明らかにされていない。日本語教育に関していえば、大学3・4年生用のカリキュラムの改訂や教育内容・教授法の改善などについては、谷部(1999)の調査があるが、1・2年生における言語知識の習得及び4技能の養成についての調査はほとんどなされていないといってよい。本稿は、4技能の一つである「聴くこと」に焦点を当て、中国の大学で聴解授業を担当している教師にインタビュー調査を行うことにより、教師から見た聴解授業の実態と課題を明らかにすることを目的とするものである。

ここで、聴解授業に焦点を当てたのは、(1)中国においては「聴く・話す」という2技能の養成に力を入れてきたにもかかわらず、結果的に読み書きの能力が優れ、「聴く・話す」の能力が劣っている学生が多い(宿1991)、(2)4技能のうち、学生は読み書きより、聴く・話すのほうが困難であり、さらに、話すことより、聴くことのほうが

難しいと感じている（尹 2001）など、聴解は4技能の中で特に難しいスキルであることに加え、(3) 中国では、大学や研究所、企業、観光業関係など多岐にわたる学生の進路状況から見ても、十分な言語知識の習得と、高度な聴解力と口頭表現能力が必要とされ、コミュニケーション能力の養成は重要な課題となるが、その一端を担う聴解授業についての実態はほとんど明らかにされていないという理由による。

本稿は、その実態を明らかにする試みとして、(1) 中国では、大学の聴解授業がどのように行われているのか。(2) 担当教師は聴解授業をどのように考えているのか、などについて、中国にある4つの大学で聴解授業を担当している教師にインタビューを行う方法を取った。この調査によって、4大学の聴解授業の実態及び課題の一部は明らかになると考えたからである。以下では、まず、中国の大学における日本語教育事情について簡単に紹介した後、担当教師から見た聴解授業の実態と課題について述べる。

2. 中国の大学における日本語教育の概況

中国の大学における日本語教育は、日本語を専攻とするかどうかによって2種類に分けられている。一つは日本語を主専攻とする「日本語専攻」⁽¹⁾であり、もう一つは、第一外国語や第二外国語として学習する「非日本語専攻」である。本研究では、前者の「日本語専攻」について調査を行っている。「日本語専攻」には4年制の「大学本科」と2-3年制の「高等専門科」がある。いずれもほとんどの学生が大学に入ってから日本語を学習する。4年制の日本語専攻では、1・2年の「基礎段階」、3・4年の「高学年段階」に分けられている。ここでは、4年制の「日本語専攻」における日本語教育の概況について、中国の教育部（旧称：国家教育委員会）によって制定された教育指導要領『大学日本語専攻基礎段階教育大綱』（以下『大綱 1990』）及び『大学日本語専攻高学年段階教育大綱』（以下『大綱 2000』）に沿って紹介したい。

2.1 『大綱 1990』に述べられている日本語教育の目的

『大綱 1990』では、外国語教育の最終目的として言語交際能力の養成をはかることとしている。言語交際能力とは、実際のコミュニケーションの場にふさわしい、自由な言語運用ができることである（大綱 1990：350 筆者訳）。このように、言語交際能力の養成を日本語教育の最終目的として明確に定めたのは、『大綱 1990』がはじめてであり、『大綱 1990』以降、中国における日本語教育は、コミュニケーションに使い

る言語能力の養成という側面に目が向けられてきたといえよう。

2.2 カリキュラムの設定及び到達目標

「基礎段階」と「高学年段階」のカリキュラムの設定及びそれぞれの科目の到達目標は、『大綱 1990』及び『大綱 2000』に定められており（言語技能の到達目標については資料を参照されたい）、ここでは、カリキュラムを設定する際に、次のようなことを考慮しなければならないとされている。「基礎段階」では、「基礎言語知識と技能を訓練することを教育の中心とするべきである。その訓練とは、基本的な知識（発音、文字、語彙、文法など）、及び4技能（聴く・話す・読む・書く）を訓練することをさす（大綱 1990：349-350 筆者訳）」。「高学年段階」では、「『基礎段階』の教育を踏まえ、さらにそれに『訳す』を加え、5技能の訓練を強化すると同時に、学生の視野を広げ、さまざまな知識を増やすことをはかる（大綱 2000：2 筆者訳）」、『大綱 1990』及び『大綱 2000』によって定められた「基礎段階」及び「高学年段階」の必修科目をまとめると図1のようになる⁽²⁾。

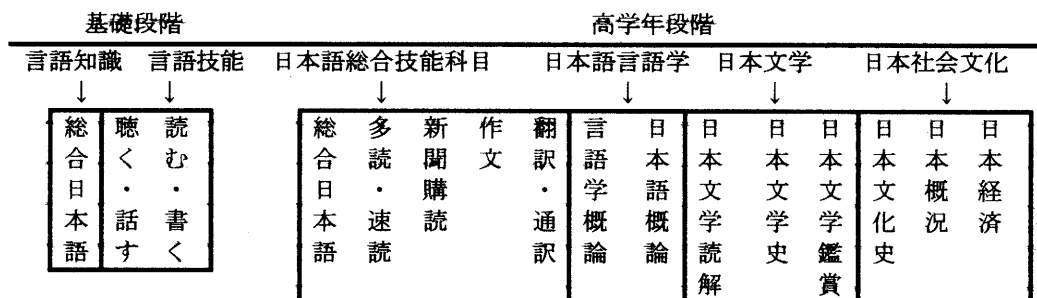


図1 「基礎段階」及び「高学年段階」の必修科目

2.3 日本語の教授法について

中国の外国語教育は、翻訳法や対訳法（伝統的な教授法）とオーディオリンガル法で行われ、その後、目標言語による直接法を併用して行われるのが一般的であり、日本語教育においても例外ではない（王 1987）。たとえば、宿（1991）、刘（1994）、吴（2000）によると、1年目は、一般的に新出文法や句型、語彙などを母語で説明した後、オーディオリンガル法によるドリル練習に入るが、2年目からは母語の使用は少なくなり、3・4年目にはほとんどの授業が日本語で行われるようになる」と報告している。『大綱 2000』でも、「高学年段階」の場合、翻訳・通訳以外の科目は、日本語で授業するようにと定められている。近年では、コミュニカティブ・アプローチを取り入れた「総合

日本語」の授業も試みられているが、ごく一部にとどまっている (田 2001)。

3. 調査の概要

上海、大連、北京にある4大学の日本語学科で聴解授業を担当している4人の教師に約20分から30分のインタビューを実施した。インタビューに応じた4人の教師(以下教師A、教師B、教師C、教師D)のプロフィールは以下の通りである。

表1 4人の教師のプロフィール

教師	大学所在地	学歴	教育経験	聴解以外の授業の経験
A	上海	修士	5年	あり
B	大連	修士	10年	あり
C	北京	博士	5年	あり
D	北京	修士	20年	あり

この4つの大学を選んだ理由は、外国語教育においても、日本語教育においてもこれらの大学は中国において代表的、指導的な役割を果たしていると考えられているからである。

4. 調査結果—担当教師から見た聴解授業について

インタビューは以下の項目について行った。(1) 聴解授業の開始時期及び一週間あたりの時間数、(2) 聴解授業の位置づけ、(3) 聴解授業の内容と教材、(4) 聴解授業の指導法、(5) 学生の聴解力について、(6) 日本語教育の教師研修経験の有無、である。これらのインタビューの内容を以下の観点からまとめる。

4.1 聴解授業の開始時期と時間数

4.1.1 開始時期と時間数

聴解授業はいつから開始され、週に何時間あるかを表2に、C大学を例として他の科目との比較を表3にまとめた。

表2 開始時期と1週間の時間数

	1年		2年		3年	
	前	後	前	後	前	後
A大学	4	2	2	2	2	2
B大学	4	4	2	2	2	2
C大学	4	4	2	2	2	2
D大学	4	4	4	4	2	2

表3 主な授業の時間数及びそれぞれが総時間数に対して占める割合

	1年	2年	3年
総合日本語	6(42.8%)	6(33.3%)	4(18.2%)
聴解	4(28.6%)	2(11.1%)	2(9.1%)
会話	4(28.6%)	2(11.1%)	2(9.1%)
その他	0	8(44.4%)	14(63.6%)
合計	14(100%)	18(100%)	22(100%)

()内は割合

表2に示したように、4大学のうち、B大学とC大学では1年次の前期から週に4時間、A大学では1年次の後期から、D大学では2年次の前期から4時間の聴解授業が設けられている。2年目からは4大学とも聴解授業が設けられているが、授業の時間数は2時間に減っている⁽³⁾(D大学の場合、2年次では聴解授業と会話授業を一緒にしているため、4時間となっている)。3年次では、4大学とも授業の名前は「視聴説(ビデオを見て、聴いて話す)」に変わり、2時間程度である。4年になると聴解授業はなくなる。

ここで注目したいのは、2年生への指導は上級への橋渡しとして重要であるにもかかわらず、聴解授業は週に2時間に減っていることである。聴解授業が減っている理由として、「本当は週に4時間でよかったが、2年では読解や作文などの授業が新しく設けられるなど、学年が上になるにつれて、必修科目や選択科目が増えてくるため、減らすのはやむを得ない。それは大学側のカリキュラムの設置に問題があるからだ」と4人の教師は述べている。

4.1.2 1年次の前期から聴解授業を設けない理由

表2に示したようにA大学で1年次の前期、D大学で1年次通年は聴解授業をもたない。その理由については、教師Aは「うちの1年次の前期には聴解授業がないが、総合日本語の授業で音の識別など基礎的なことはやるし、総合日本語の期末試験にも聴解の問題が20%も占めている」と説明している。教師Dは「大学に入ってから始めて日本語を習う学生なので、何を聴いてもわからない。したがってしっかりした日本語の基礎知識を身につけてから、授業をはじめたほうが効率的である。それに、総合的な能力を養成する総合日本語の授業では、文法・文型を習うと同時に、話したり聴いたりする練習を多量に行うため、聴解力も一緒に育てられる」と述べている。

4.2 担当教師から見た聴解授業の位置づけ

4.2.1 聴解授業に対する教師自身の態度について

担当教師自身は聴解授業をどう考えているかについて、教師Aは、「4技能の中で、聴解はもっとも重要であると思う。相手の話を聴いて理解できなければ、コミュニケーションができないからだ。しかし、現在のカリキュラムにおいては、総合日本語の授業と比べると付随的で形式上設けられているだけなように感じている」と述べている。教師Bは、「4技能の養成については、まず聴解力と口頭表現力を養成し、その後、4技能をバランスよく伸ばしていくということがよくいわれるが、実際に聴解が十分

に重視されているとはいえない」と語っている。同様に、教師 C、教師 D も聴解授業が重要な授業であり、重視すべきだと自分自身は認識しているものの、大学側や一部の教師や学生はあまり重要視していないと述べている。

4.2.2 担当教師から見た聴解授業に対する大学側の態度

聴解授業に対する大学側の態度については、大学側は聴解授業をあまり重視していないと 4 人とも感じている。教師たちによると、4 大学では、聴解授業を新米教師や教育経験がまだ浅い教師に担当させることが多い。それは、大学側が聴解授業はテープを流すだけで、総合日本語や他の授業と比べれば、教えるテクニックや準備する時間などが必要ではないと考えているためである。4 人の教師とも大学の日本語教師になってはじめて教える授業は聴解であった。「聴解授業がこのように位置づけられていることから、聴解授業は重要ではないと無意識的に考えるようになり、教師は積極的に聴解授業を担当する意欲があまり出ない」と教師 A、教師 B、教師 C は分析している。

また、4 大学では 1・2 年の場合、すべての授業を交替で担当することが多い。このことから、聴解指導に力を入れようと思っても、担当科目が学期ごとに変わるため、集中できない場合もあるという教師の声もあった。一方、教師 B は「うちの大学では 2・3 年前から聴解指導研究室が設置され、1・2・3 年生の聴解授業をどのようにするべきか試行錯誤しながら活動している」と述べている。

4.2.3 担当教師から見た聴解授業に対する学生の態度

一部の学生は聴解授業を重視していない（教師 A、教師 C）。その理由として、2 人の教師は「中国の大学入試は、外国語学部を受験する場合、外国語（ほとんどの場合英語）試験科目には筆記試験と口頭試験はあるが、聴解の試験はないということである⁽⁴⁾。学生は筆記試験と口頭試験の受験対策は高校で多くやってくるが、聴解の練習はおろそかになっている。そのため、大学に入って日本語を学び始める際にも、聴解を重視する考えが希薄になりがちなのではないか」と推測している。

4.3 聴解授業の内容と教材

4.3.1 聴解授業の内容

聴解授業の内容については、1 年目では、D 大学を除く 3 大学で、ディクテーションによる音の識別、単語や文の聴き取りを中心に行ってから、徐々に簡単な日常会話、短い文章の聴き取りに移る。後期になると、日本語能力試験 3 級の準備もはじまる。2

年次では、4 大学とも少し長い文章、ニュースの聴解練習とともに、日本語能力試験 2 級、1 級の準備に力を入れ始める。1・2 年の間は、テープによる聴解が中心となるが、学生の関心を引き出すために、たまに日本語の易しいビデオも見せるようにする。3 年になると、テープによる聴解から、最新の日本のドラマ、映画などのビデオの視聴に変わる。

4.3.2 使用する教材

4 大学で使用する教材は日本で作成されたもの、中国で作成されたもの、また、担当教師がラジオなどから選んだ生教材の 3 種類である。1 年次では、D 大学を除いて各大学の教材はだいたい決まっているが、2 年次では担当教師が選んだ教材を使うことが多い。1・2 年とも統一した教材を使用する大学は、A 大学のみであった。この点に関して、教師 A は「以前統一教材がなかった時、教材選びに苦労した。きまった教材があったほうが教えやすいし、教える進度も把握しやすい」と述べている。一方、教師 D は「確かに教材選びに苦労するが、ニュースなど常に最新のものを聴かせたいので、きまったものがなくても不便ではない」と述べている。教師 B、教師 C は、「2 年次になると、日本語能力試験の対策を中心にやるので、手元にある教材で間に合う」と意見を述べている。3 年次では、手元にあるビデオや衛星放送から録画したものを学生に見せるのが一般的のようである。録音教材に関しては、「内容が古い」や「いい教材が少ない」という意見が多く聞かれた。

4.4 聴解授業の指導法

4.4.1 4 大学に共通した指導法

聴解授業をどのように行っているかについて尋ねたところ、4 人の担当教師は「自分の実際の教育経験から模索した方法で行っている」と述べている。「基礎段階」での会話や文章の聴き取りに関する指導法については、4 大学の指導法には多少異なる部分があるが、共通したものも多くみられた。共通した指導法を表 4 にまとめる。

表 4 をみると、4 大学では、語彙や文の意味から全体の内容を理解させるボトムアップ的な指導を行っていることがわかる。そして、授業以外の時間での復習もさせている。

表 4 4 大学の「基礎段階」における聴解指導法

- | |
|--|
| <p>(1) 全体の内容を1回聴き取らせる。</p> <p>(2) <u>細かく聴く場合</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 1文ごとに1・2回聴かせ、ノートに書き取らせる。 ・ 再び文ごとに聴かせ、学生を一人ずつ指名し、聴き取ったものを日本語でリピートさせる（できない場合、中国語で意味を言わせる）。 ・ 学生から出されたわからない語彙や文法を説明する。 ・ 段落ごとに1・2回聴かせ、ノートが正しく取れているかどうかをチェックさせる。 ・ ノートを見ないで全体の内容を1・2回聴かせ、自分の言葉で内容を話させる。 <p><u>大まかに聴く場合</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ノートを取らせながら全体の内容を1・2回聴かせる。 ・ わからない語彙などを説明したり辞書で調べさせたりする。 ・ ノートを見ないで主な内容を自分の言葉で表現させる。 <p>(3) 質問に答えさせる。</p> <p>(4) 授業で用いた教材を録音させ、家で復習させる。</p> |
|--|

4.4.2 現在の指導法についての評価

現在行われている指導法をどう評価するかについては、教師 D は「適切だと思っている。なぜかという、学生の語彙の量が不足しているからである。とくに、単語などは目で見ればわかるが、耳で聴いた場合、既習語であっても、聴いてすぐに音と意味を結び付けられなかったり、間違っ聴いたりすることが多い。したがって、何回も繰り返して聴かせることによって、正確に音を聴き取れ、内容を理解していく。要するに、内容を理解できるかどうかは、正確に音を聴き取るかどうかにかかっている。この方法を通して、音と意味を瞬時に識別する能力を徐々に養成していくことができる」と述べている。

表 4 を見ると、4 大学とも学生の既有知識を活性化させるための事前活動はなされていないが、この点について教師はどのように考えているのだろうか。行わない理由については、ニュースなど難しい内容を聴く際に、絶対に学生が聴き取れないと思われる人名や地名などを事前に提示する場合はあるが、文章や会話を聴かせる場合は提示しない。事前に何か情報を提示したら、学生がそれに頼ってしまうことになり、耳の練習にはならない。また、聴き取れたものの意味がわからない場合、辞書で調べることにより、ことばや意味を印象深く覚えらる。さらにいえば、すべての教材に背景的なものが提示できるとは限らないし、提示したものがどれだけ内容理解の助けとなるかわからないから、耳の練習が一番大切である（教師 C、教師 D）。教師 A、教師 B も「既有知識を活性化させるための活動の手順を明記したテキストがあれば使って

みたいが、聴解力を向上させるにはなんといっても耳からの練習が重要である」と述べている。

3年次では、ビデオの視聴となるが、その指導法としてビデオテープを見せ、内容に関する質問に答えさせるのが一般的であると4人の教師は述べている。「テープの聴解と比べると、ビデオによる視聴は視覚的サポートがあるため、内容はわかりやすくなるかもしれないが、視覚的情報が逆に耳の練習のじゃまになる可能性もあるので、3年生の聴解に関する指導はより工夫しなければならない」と教師Cは述べている。

4.5 学生の聴解力について

学生の聴解力については、「総合日本語などの成績と比べると、あまり高くはない。日本語能力試験の1級・2級に合格しても、聴解テストの得点が低い。彼らの聴解力を向上させるためには、どうすればいいか自分なりに試行錯誤しているが、週に2時間の授業のみでは、聴解力を養成することはきわめて困難である。授業以外の時間でも、学生が自主的に時間をかけて多量に練習しないかぎり、聴解力は伸びない」と4人の教師とも述べている。

4.6 日本語教育の教師研修経験の有無について

日本語教育の教師研修を受けたことがあるかについて、4人の教師は「定期的に時間をかけて受けたことはないが、日本人の専門家による研究発表や教授法の紹介などの研究会に参加したことがある。機会があれば定期的に受けてみたい」と述べている。

5. まとめと今後の課題

今回行ったインタビューの内容をまとめると、以下ようになる。

(1) 4大学のうち、1年次から聴解授業を設けている大学と、1年次の後半または2年次から設けている大学に分かれており、聴解授業の時間数は1年次では4時間、2年次では2時間となっている。授業内容に関しては、4大学とも2年次の後半から日本語能力試験の対策が中心となる傾向が強いことが示唆された。このように試験のための授業が続くと、授業内容は試験問題のタイプに限られるため、受験のためのテクニックは身につくかもしれないが、いろいろなジャンルのものを聴く機会が少なくなるおそれがある。結果として『大綱1990』で定められたコミュニケーション能力の養成という教育の目的から考えると、その一端を担う聴解授業の役割は十分に果たされていない可能性があると考えられる。よって、1・2年次という日本語の基礎固めの段

階や3年次では、限られた時間内で聴解授業をどう行うか、何を教えるかといったことが課題であるように思われる。

(2) 聴解指導法に関しては、語彙や文の積み重ねによって、全体の内容を理解させるような方法をとっている。コミュニケーション能力の養成という日本語教育の目的や多岐にわたる学生の進路状況などを考えると、現行の指導法のみでは、その目的を実現するのに十分でないと考えられる。なぜなら、聴解授業は個々のテキストの内容を理解させるのが最終目的ではなく、授業以外でも日本語を聴いて理解できる方法を学生に教えなければならないからである。たとえば、尹(2002)はトップダウン的な指導の可能性を探っている。尹(2002)の中国の大学生を対象にした研究では、学生の既有知識を活性化させ、予測しながら聴くということの有効性が確認されている。学生の日本語知識や日本に関する知識が増えるにつれて、コミュニケーション能力を促進するという目的に沿って、現行のボトムアップ的な指導に加え、トップダウン的な指導も教育現場に取り入れていくことも必要であろう。

最後に、4人の教師は自分自身が聴解を重視しながらも、カリキュラム上の制約などから力を注ぐことができない。また、大学側や一部の学生があまり重視していないという状況が見受けられた。聴解はさまざまな知識の相互作用によってなされ、複雑なプロセスであるため、ただテープを流すだけでなく、教える側にとっても高度な技術が要求されるということや大学側、教師側に再認識させる必要があるように思われる。そして、聴解はコミュニケーションにおいて重要であることを学生たちに意識化させなければならない。聴解授業の時間数が減っているからこそ、コミュニケーション能力の養成という目的を達成させるためには、聴解授業をより重視し、指導を十分工夫することが求められる。

注

- (1) 「日本語専攻」とは、かつての「日本語言語文化専攻」あるいは「日本語言語文学専攻」である。
- (2) 図1の中の「総合日本語」は、本稿における科目名であるが、中国では「精読」と呼ばれる授業である。「精読」は、日本語の「精読＝精密な読解」をするための授業ではなく、言語知識を中心に4技能を総合的に教える授業である。学年が上になるにつれて、初級日本語、中級日本語、上級日本語ともいう。

- (3) 今回インタビューを行った大学以外の大学においても、2年生の場合、聴解授業は週に2時間である。詳しくは『大学日语专业教学国际研讨会论文集 2000』を参照されたい。
- (4) 聴解の試験がある場合も、その成績は総合成績にカウントされていない。2002年の入学試験から成績としてカウントされるようになった。

参考文献

- (1) 尹松 (2001) 「日本語学習者のビリーフについての意識調査—中国首都師範大学の場合—」『日本語教育研究』第41号 115-129 言語文化研究所
- (2) 尹松 (2002) 「パターン学習は理解を促進させるか—ラジオニュースの聴解の場合—」『日本語教育』112号 35-44
- (3) 谷部弘子 (1999) 「中国の大学における日本語教育の質的变化—言語教育と専門性—」『日本語教育』103号 99-108
- (4) 教育部高等院校外语专业指导委员会编 (2000) 《高等院校日语专业高学年阶段教学大纲》大连理工大学出版社
- (5) 刘建云 (1994) 「二年级综合日语教学法初探」《中国日语教学研究文集 5》267-278 中国日语教学研究会选编 吉林教育出版社
- (6) 皮细庚主编 (2000) 《大学日语专业教学国际研讨会论文集》上海外语教育出版社
- (7) 田鸣 (2001) 「语言能力与交际能力并重的教学尝试」《日语学习与研究》第3期 45-47 对外贸易经济大学出版社
- (8) 宿久高 (1991) 「论日语实践课的教学方法」《中国日语教学研究文集 3》167-175 中国日语教学研究会选编 上海译文出版社
- (9) 王庆民 (1987) 「试谈外语教学传统法与听说法的结合」《日语教学研究论文集》258-264 中国日语教学研究会选编 商务印书馆
- (10) 吴立新 (2000) 「关于高级日语课程教学的探讨」《日语学习与研究》第4期 49-51 对外贸易经济大学出版社
- (11) 中国国家教育委员会编 (1990) 《高等院校日语专业基础阶段教学大纲》高等教育出版社

資料 言語技能の到達目標

『大綱 1990』の付録 2 の「言語技能表」及び『大綱 2000』より引用、筆者訳

聴くことについて

基礎 段階	1 年	<ul style="list-style-type: none"> ① 流れてくる音声の中から正確に各音節を識別することができる。 ② 教室用語及び平易な日本語による説明を聞いて理解することができる。 ③ 習っているテキストと同難易度の聴解教材及び録音材料を聞いて理解することができる。 ④ 学校での日常生活をトピックとした談話を聞いて理解することができる。理解度は 80% 以上である。 ⑤ 話速が 1 分間 200-220 字であり、未知語が 10% 以下で、新しい文法事項のない聴解材料を聞いて理解することができる。2 回聞いた後、大意を理解し、主なあらすじを掴むことができる。理解度は 75% 以上である。
	2 年	<ul style="list-style-type: none"> ① 日本語による講義及び習っているテキストと同難易度の聴解教材・録音材料を聞いて理解することができる。 ② 普通の話速で日本語母語話者が標準語を用いて行う講義あるいは簡単な報告を聞いて理解することができる。理解度は 65% 以上である。 ③ 話速 1 分間 240-260 字であり、未知語が 10% 以下の生の聴解材料を聞いて理解することができる。1 回聞いた後、大意を理解し、主な内容とあらすじを掴むことができる。また、話し手の気持ちと態度を理解することができる。理解度は 75% 以上である。 ④ わが国の国際放送における対日放送のニュース及び文化を紹介するような番組を聞いて主な内容を理解することができる。理解度は 75% 以上である。
高学 年 段階	3 ・ 4 年	<ul style="list-style-type: none"> ① 普通の話速で日本語母語話者が標準語を用いて行う講義、談話を聞いて理解することができる。すばやい反応で、正確に理解し、中心的な内容を復唱できることが要求される。 ② 日本のテレビ番組や現場リポート、方言話者による談話を聞いて、重要な内容とあらすじを把握することができる。

話すことについて

基礎 段階	1 年	<ul style="list-style-type: none"> ① 比較的流暢に学習内容に沿った会話をするすることができる。問題に答え、簡単な日常会話をするすることができる。 ② テキストの内容や聞き取れたことについて答え、復唱することができる。 ③ なじみのある話題について、ある程度の事前準備のもとで 1-2 分のスピーチをすることができる。話速は 1 分間 100-120 文字以上で、大意を伝えることができる。 <p>以上の各項では、比較的正確な発音・イントネーション、並びに表現、文法や語彙の使用に重大な間違いがないことが要求される。</p>
	2 年	<ul style="list-style-type: none"> ① テキストの内容や聞き取れたことについて、質問したり答えたり、ディスカッションしたりすることができる。 ② 日本語母語話者と日常的な場面及びフォーマルな場面でのコミュニケーションをすることができる。 ③ ある特定の場面で、ある程度の事前準備のもとで 2-3 分の即席のスピーチをすることができる。話速は 1 分間 120-140 文字以上で、大意を伝えることができる。 <p>以上の各項では、なめらかな日本語、正確かつ自然な発音・イントネーション、並びに文法や語彙の使用に重大な間違いがないこと、正確な表現が要求される。</p>
高学 年 段階	3 ・ 4 年	<ul style="list-style-type: none"> ① 日本語で比較的正確に自分の考え、感情を表し、日本語母語話者と自由にコミュニケーションすることができる。 ② ある程度の事前準備のもとで、日本語で即席のスピーチをことができ、学術的な見解を述べるができる。また、なじみのある話題についてディスカッションやディベートしたり、わが国の国策や方針、国内外の問題について自分の意見や考えを述べたりすることができる。 <p>以上の各項では、正確かつ自然な発音・イントネーション、流暢さ、文法の使用において内容理解に支障のある間違いがないことが要求される。場面や聞き手によって、異なる表現を正確に選択することができる。とりわけ、言葉の意味合いの把握、敬語の使用はほぼ正確である。</p>

読むことについて

基礎 段階	1年	<p>① 習っているテキストあるいは同難易度の授業以外の読み物を比較的流暢に音読することができる。発音・イントネーションが正確であり、文の切れ目も正確であることが要求される。</p> <p>② 未知語が10%以下で、新しい文法事項のない読解材料を読んで理解することができる。読む速度は1分間160-180字以上である。主な内容を理解し、重要なあらすじを掴むことができる。理解度は80%以上である。</p> <p>③ 辞書などを利用して、日本の民間で伝承されている物語を読むことができる。主な内容を理解し、重要なあらすじを掴むことができる。理解度は80%以上である。</p>
	2年	<p>① 習っているテキストあるいは同難易度の文章を流暢かつ正確に音読することができる。発音とイントネーションが自然かつ明瞭である。</p> <p>② 未知語が10%以下の日本語の原文を読んで理解することができる。読む速度は1分間130-200字以上である。主な論点を把握し、大意を理解することができる。理解度は80%以上である。</p> <p>③ 辞書などを利用して、「走れメロス」と同程度の日本語の書籍や雑誌を読むことができる。文章の大意を理解することができる。理解度は75%以上である。</p>
高学年 段階	3・4年	<p>① 非常に専門性の高い科学技術資料を除き、現代日本語の文章を読んで理解することができる。最新の外来語、流行語及びまれにしか使われない語彙以外は、未知語がないということが要求される。日本語の文章を読んで、作品の主旨や作品の世界観を理解することができる。主な内容について帰納的にまとめ上げ、要約することができる。文章に現れた考えや観点、文章の構造、表現的技巧、文体修辭を独自に分析することができる。</p> <p>② 辞書などを利用して、注釈などを参考にして、古文、和歌、俳句などの古典作品や文章を読んで大意を理解することができる。</p>

書くことについて

基礎 段階	1年	<p>① 習っているテキストと同程度の短文をディクテーションすることができる。3回読み上げ、話速は1分間100-120字である。正解率は85%以上である。</p> <p>② 授業時、質問に筆記回答をすることができる。</p> <p>③ 日本語で日記をつけ、簡単な手紙を書くことができる。</p> <p>④ 習った知識を利用し、1時間以内で400-600字の文章を書くことができる。</p> <p>以上の各項では、正確な文字及び書式、論理的な展開、吟味された語彙の組み合わせ及び使用、並びに文法及び語彙の使用に重大な間違いがないことが要求される。</p>
	2年	<p>① 聞き取った内容や読んで理解した内容について、質問に回答したり、要約したりすることができる。</p> <p>② 手紙や履歴書を書いたり、書類に記入したりすることができる。</p> <p>③ 講義あるいは比較的なじみのある講演について、内容の3分の1にあたる大意を日本語で書き留めることができる。</p> <p>④ 習った知識を利用し、1時間以内で600-800字の文章を書くことができる。</p> <p>以上の各項では、正確な文字及び書式、流暢な日本語の使用、比較的合理的な語彙の組み合わせ及び使用、論理的な展開、並びに文法及び語彙の使用に重大な間違いがないことが要求される。</p>
高学年 段階	3・4年	<p>① 日本語の正確な書式及び言葉遣いを用いて、正確な意図を伝えられるような手紙、調査報告など文体の異なる各種の文章を書くことができる。内容が広く深く追究され、かつ充実した説明文、意見文及び論文を書くことができる。</p> <p>② 研究テーマを見つけ、先行研究の収集、整理、分析、論文の要旨の作成、論文完成といった卒業論文（学士論文）の書き方を身につける。</p> <p>③ 構想はすでに練り上げてあるという前提で、書く速度は1時間600-700字である。日本語が基本的に正確で、特に目立った文法の間違いがなく、言葉遣いが適切で、「普通体」と「丁寧体」の使用が正確である。</p>

訳すことについて

高 学 年 段 階	3 ・ 4 年	<p>① 通訳の場合：準備なしに、日常生活の通訳をすることができる。さらに、準備のもとで、政治、経済、文化などの分野の通訳をすることができる。本来の意味を忠実かつ流暢に表現でき、異なる語感と話し手の心理を察することができる。</p> <p>② 翻訳の場合：現代日本語で書かれた各種の文章、書籍を訳すことができる。辞書類や注釈を利用して、日本語の古文を訳すことができる。『人民日報』の社説程度の文章を日本語に訳す場合、訳す速度は1時間400-500字（日本語の1000字に相当）である。日本語から中国語に訳す時、訳す速度は1時間500-600字。文学作品の場合、作品の雰囲気、世界観及び文体が原文と一致すること。外交書類、経済契約書及び政治性の強い文章の場合、原文に比較的忠実で、内容は正確であること。</p>
-----------------------	------------------	--

(お茶の水女子大学大学院)

The Present State of Japanese Listening Courses in Chinese Universities: Based on Interviews at Four Universities

YIN Song

The goal of this study is to investigate the current situation of Japanese listening courses in Chinese universities. In order to do this, 4 teachers of Japanese listening course were interviewed. Based on the data obtained from these interviews, the following two points were clarified: (1) Three of the four universities offer listening courses to freshmen (in either the first or second semester), the other, to sophomores. From the second half of second year, the content of listening courses is based primarily on the content of the Japanese-Language Proficiency Test. (2) As for teaching method, teachers have students understand the general idea by repeatedly listening to the tape, while the teacher explains the meaning of vocabulary and sentence patterns.

(Graduate School, Ochanomizu University)